伝えたい、伝統芸能の心

高森町伝統芸能連絡協議会会長　本田　研一

大村古墳一帯は、上色見において最も古い地域です。

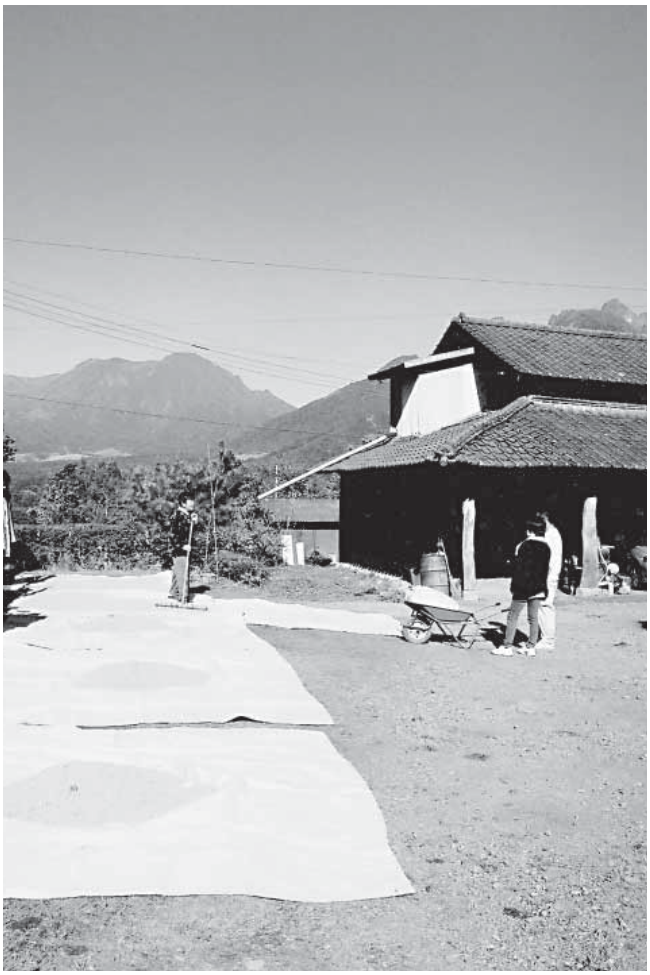
古墳の裏手、外輪の影に冬場はより寒い日を過ごしたであろう地を、「てらうど」と言います。すなわち「寺跡」と書くわけですが、現存する上色見中原にある「了蓮寺」が鎌倉時代の建立とすれば、それより古くからあったとするのが、地区の老人の口癖でした。

私が少年の時、しょい川の土手に石燈篭が横たわっていたのを覚えています。

現在その寺跡には、桧が植えられており、こんもりとした土がその跡だと言われています。

五世紀頃のものだとする、大村古墳の石棺。

真っ青な空の下、溢れているベンガラの赤色が、距離をおき、人々に敬いの心をひらかせます。手を合わせ祈る。それが自然の行為でした。



▲上色見大村地区

ここより、一九九九年五月三一日発行の、毎日新聞全国版に連載されている、「さだまさしの日本が聞こえる」より転載いたします。

「…本田氏に発掘済みの古墳を検証させてほしい、と頼んだ。三世紀、北九州における聖なる火の山が雲仙岳であったことの証明に、阿蘇の最も古い古墳が五世紀以後のものであることを確認する必要があったからだ。

本田氏は快く引き受けてくれ、発掘済の古墳を再び我々に公開してくれるよう計ってくれた。服部克久先生にこの話をしたらすっかり乗って、再発掘の日に東京からやってくることになった。ところが熊本の天候が悪く、服部先生の飛行機は博多に着いた。先生が慌ててこちらへ向かう間のこと、その間に高森で新しい古墳が見つかったのだ。一四年間に四つしか見つからなかったのに、その五つめが出たのだ。

奇跡的な歴史との邂逅。僕らは考古学者でもなかなか出会えない石棺の蓋を開けるという大役を仰せつかったのだ。

まず、僧による回向のあと、服部先生と二人で蓋を開けた。その古墳は五世紀以後のもので母親と子供の合葬だった。石棺の内側にベンガラが塗ってあった。

さて、実はその蓋を開けた瞬間のこと。僕の鼻腔をくぐり抜けて、あっという間に消え去った香りがあった。千数百年の時を超えた香りだ。匂いの記憶は確かだ。その時の香りが素晴らしかった。はかなげで、そのくせどこか生々しく、優しく、それでいてさわやかだった。その香りが忘れられずにいた。

ある時、この香りにとてもよく似た香りに出会った。それがロイヤルコペンハーゲン・ムスクオイル・オーデコロンだった。麝香と樹の香りを混ぜたという…。」

さだまさし氏は、他に新潮社発行の著書の中にもこの大村古墳がでてまいります。

少々情況を補足します。

その石棺内部には水が溜まっており、残りし髪の毛が、やがて消えてゆきました。頭骨をかくすかの水溜りは、真っ赤なベンガラを背に、青みがかったすんだ透明色でした。

共に亡くなったのか、それとも追葬されたのか寄り添った子供。傍らに刀剣がありました。

さだまさし氏に、「邪馬台」の名の曲があります。それは発掘終了後、感動を抑えきれぬままかかれた曲でありました。